



世間姑

世間姑乳質卷之二

目録

① 月一振な姑おなちがもを引合わかて糸下けこう向むかひ

どうやう波の中へ出れまじつ一人ひとり在あり

海うし牛うしハうしづきよふ鳥とりれ合あはれ

中なかへ死しんですくまめいる名鳥なとりを



② 姑が守ありと侍て居る嫁が樂は生茶

乃櫃の申百をひれ丁雜まで古おする

二日目の能加減

階り百あれる金が若及へ引入一黄金のひり

町中が若人等様をとおる氣味は能格也

世間姑氣質卷之貳

○ 日ト松を姑ちち子を引合とれあり下向ら

どう座ら御の中へあれまゝう一人の日は

階半々うしつこゝろあつたあつたをうしれ中へ

まびんやでまどれと名馬を

流れま砂らつらうと代はなれまのこひはせせぬ

流ら山世。とを弱み下ぐまをも初家連能は心を

くく久激は和ふれ風俗じぶある多昔れ雲胡はて

うをりあやうくとれあや付は。花よとつては嫁子小

御強祖母。とつあつたをるれ竹木。何雨も初下京をよ



油びらうふりきりおん檀ろうり紙でふいて  
ありまこれら傍へ嫁が来ていふア悪くおとくされ  
師を油ら火よこころつひく信らまはまどおん檀  
れ肉で二の油一をなればお米極がお守りせーま  
まどお守りお守りぬますあ。かおつひりへあ一漏く  
うけて呪て並なれといまよまううつひりへ嫁が指  
ささであ一ぶつてけおの油へぬりまひ出すまの腹  
れ立るとおやとぬーまて無勿折つま念れ位牌で  
嫁が頬をこた一寸叩まはまらそれうら貞とあま  
かて腹痛がするとやらうを師をせうまよ火燈へ

らり。今内とわがまをけんよまお死な。おまへごと  
つまらちて来るがめんれ極果しや。南守の孫陀仏くと  
咄れ話を念仏でおさへくれは茶屋に姑姉をいやま  
らふごことはいーあひ。まうーあのお嫁を女志んあま  
りて。よがもそれ花らうふんるもの。中くんけと  
らまうふ遠くおお米お嫁。才一せんごく物ごまらいて  
はろのぐやま。嫁がぬうこ地一つもまうう氣よ入るま生  
ぬての自情承若ゆへ夏帷子れをいくなまら一向嫁  
よはまをくら好ず。るまをまといわて志まはと販まを  
お米おの守りあが志まといあ積が積まるといあ



女形録 巻之二  
まゝよつげをを息子まてれ字が悪うなり母老人  
まゝよつげもそのやうよき事とせうくくいと志やんを。  
ある格らるる事りげり志て世帯此のいぢりくをりけ  
てたうやと姑が嫁をよやくいふれ世間うらんでも  
うふないものよあぢいふゆへ程嫁がやめさる。息子  
とが不孝な奴と云へど腹が多てもうがきて有り候せぬ。  
長生すれど恥多しと昔おらりあてにる毎りよらぐい  
ませぬらゆりもお念仏うまぢりうて事おれがけこ  
ほらり。よふお事よぢるやと百年も生てわく  
世帯れまゝいふれうらうらと味も悪れぬ知といふ姑が

おれ嫁の志とせぬで三人れ子供よぢりくく  
まゝよつげの志とせぬで三人れ子供よぢりくく  
傳。乳飲子を脊中よ負て歩路り味着ついでり志と  
おうげで合はれり向。昔世と志て受けと負付が悪うて  
持病の血れとち。赤血と志て志くするとちとシくんや  
こゆりま。た三人あぢり志して見事ばはし格らるる事  
乃負正格も似るる事あらやと三人が夢を拵へてるれが  
おむいことや格らるる事うらぶの嫁ハ氣をいれぢりんと美  
しい事付で志んせらる事。まゝよつげの孝ひを事らなれ  
娘でもりの格よいらまゝと志ます候。それでも息子が

園は猶ほをすううーがくやうの母よとて母よとて母よ  
すまふとい。かーでも母と藤末よとてとてとてとて時  
らふらわぬ丸裸でこつた出すとそれいさびあうや  
ますと腹をうとちのりもせず。只亭主とてさかりい  
まりしてあがゆふまひりまする嫁が守れあひ格よ  
あてさうせしとてさうと年あてと更とていさ  
あて芝居をいもおろくつとていさーとていさ  
あまよいおめを青でもさうのてあましてゆわいと  
空腹でもさうとて。内徳で格れを格もあてさうを  
さうとて格れり格も大方格がゆーからあま入してはとほし

とてにさしたあまをぬ。をさういふよとていさ  
あまらすあまらすあまらすあまらすあまらすあまらす  
是が別佛のおげを格ひるでゆわたります南無阿彌陀佛  
しとていんの誠社会徳で心の徳とあつらとあま入けさ  
あま三人の格らさうやう此れ拍あがぬけ。又それを子た芝  
居れ格れは四條乃場をあらせて格れさう入る。お定のれま讀  
念仏半のりしつとてさう馬つとてあつらけの此は茶屋の  
真心が格れいさういさういさういさういさういさういさう  
下向乃の真心一人神の中ままらつとてさうさう年を祀母  
とてこれつんさうさうさうの格もさうさうさうさうさう



② 姑が守ありを初て居る嫁が樂々を生薬に櫃の  
 申百まひ此下推まを右らする二日目のふか減  
 減百あはる令が若く引入し一黄令此をり町中が  
 令令て様子を打と氣味のふか様

あふし一ツ叶入る又二ツ三ツ四ツあつたつしれ垂ややむ  
 ことあふし秋もかくつら孫をせむぐまてつらんや  
 りくよおつて二ツ三ツあつたあつたを世れ中のつひの本音屋  
 桂甲布が小袷女着るをねど肉福あうへ秋のまより  
 世とあつてすすけの風をそり叩く多くうれあひもつら  
 ぬ令れ百あ斗も世日程がるよりあけあつて桂甲布

お月ハ是程もや風と一人もうけを始終高れ拍子  
 ゆさなれた一ツの石堂ハ中れ女房と母妙冬が悪まを  
 が一ツの石堂ア、まよふ二三年れ内まよでも産ごう孫れ  
 せまて姑中もよふやをともあつらんと氣とねさごと  
 石堂ハ男れさえんド。女房をさる女ながら只の若姑の氣ねよ  
 心を若くあ若くけつが秋のひら人飲食をべし時成り家  
 ねさよハ石堂續く生れおまがねあつた分て秋おれ  
 らふま入るま耳よくてもほしく。一糸う二糸よつり色あ  
 して茶漬でも喰ら合のをもをつんとあつても色紙の更  
 ひれ姑妙冬ねおとあつて秋おと嫁よ喰せねあよりれ





二人と極よさうつゝあだ。姑が腰ある鐘まで鉛戸板此  
川ゆりけ。極百あを女くとまひあてそれより葉背  
おろすすしゆりて夜終れ結核ならんと葛葉よつめ  
てあふまゝよ考くあし。み人此置紙古打して常  
やまゝ。あんどどの火で女を移すつく小勢でお後  
をんをいひひよあは徳江の。ゆてえな内はハさつけも  
やいあは紙がかくしてああ。まそつとそらうとあて  
るうとどどは紙の葉人た打うあつとそはハお取あ  
氣がけさあ。極月よさ茶のまうらま。小判が百あ  
米からとれ中よ入てあさうらあわればまはつねは

紙さししてあさうとて又み人がまより。着おあうらう  
味多極やぞかささしそれうらんせへかりて午り  
葉背れしゆりて茶袋。生茶の櫃のあてとれハ  
中よぬらまを極あり。サア是を紙よらままうら  
よ入てうさまませら口人の紙は小折の紙くと  
ゆらうやう紙けハ一向あかあのみふ茶は生づけ  
がまゝとらう紙の置紙かりあまはまは是切とまゝ  
あんと腹があらうすいさあまを生づけで茶づけを  
らあてよまやまああうつらあていのかまはあま。いう紙は  
あまやとゆるま葉人た紙よ茶うまの中とあし。茶が

ぬるむとめびりしゆ被茹此生づけと松ゆてみ人よ  
らうらぬ飯一重切よして茹を一人おは九つづて丸でぢぢ  
喰ひ。姑ぐみれーまよまよまよ二練入の湯徳利まよ  
まよ練ゆりま湯をみ人の塗織錦く茶碗よひまらけ  
何そよ青いまいこ青さごあまごまじけらる寝るを  
まよ極ま今来此まこまあるあ心をあつてもまよ  
まありに。滋又ゆゆい大敷れいふい居れま桂屋らまよ  
ち飯よある斗も運ぬすらつらりありが肉桂と麻草と  
れお傷けいこまよ。いこまよまよまよまよまよまよ  
まよまよーあ力一重ち飯よて買魚一とまよまよまよ

飯有金百両よ外貸付れまも怪女言とまよまよ  
三百両まよりのまよ同屋へ中と極りありーがかり飯天  
野も抄子ゆ人若新よまよのまよまよまよまよまよ  
まよまよまよあんとらまよまよまよまよまよまよ  
飯御神御此降花長常流なるとり人立身此筋そ  
まよ京初へ宅らまよまよまよまよまよまよまよ  
まよまよまよ人ゆへ合まよまよまよまよまよまよ  
極とねてち飯をまよまよまよまよまよまよまよ  
けらまよまよ此約束まよまよまよまよまよまよ  
極りあ極まよ桂屋帯まよ居れ門口。戸まよまよまよまよ



くらり下り離してぬきとらふまゝさひ。中戸と入口とこれに  
 母女房は移り移り色盗賊と入てお人斗が茶碗酒喰ひ  
 病をなすやあそく流るへはれおとくをえりぬきぬ  
 流るぬきとらふ。運れつゝ盗人ども目もあやむとれを  
 平も無地れ流とらふ。かみと只依の僕と引連て  
 登りてくまきけき。平はして油の盗賊は流るぬき  
 勇氣なむをさうらうて入る一人くひとらへて修りと  
 押入のあまお人れ賊とらふて姑嫁の境とれ桂屋  
 と入。相お人よ今夜の相子とれぬか姑嫁二人は  
 登とらふお人れ姑嫁はけりてきて桂屋流るぬきと

三指して収盗まねし今もぬれぬしけり時流るぬき  
 盗賊はよむ。うねり一人も生て之を苦みおれた  
 才たは夜ハ立身れぬき急よ京助へ申しこれハお  
 と祝して命を助るを盗とお心と云流し力女はゆり  
 うつやまはさるけり力女きて盗人と一人て引連りて  
 是れおお急を急と云はる中と天宮とむと海はりのおめ  
 修りながら逃出せりハおも氣味能次也。姑妙女はめ  
 たさま桂屋が太極屋り教るは世活は成し事と云。被  
 是れおおと礼拜しこれハ流るぬきおより盗賊は流るぬき  
 油のくまきけきとらふ。平はして油の盗賊は流るぬき







